

# セツ ぶん

NO.97



## ひと言

### 学校には詩がある

千葉 建夫（センター運営委員）

久しく姿を消していた「クオーレ」（愛の学校）が、岩波文庫で、ほぼ60年ぶりに再刊された（デ・アミーチス作・和田忠彦訳）。

「学校に詩がある」という言葉は、小学生のエンリーコ少年に、父親が語る手紙の一節。この言葉は次に描かれる教室の情景とともに、いまも私の心をとらえる。

文字や算数を教えている先生の声。隣の教室では無数の小鳥のさえずるような声。700人の生徒がいようとは思われない静かな瞬間があったかと思うと、どっと笑いだす声。通りかがりの人たちが耳をかたむけ、「だれもが、若さと希望でいっぱいなの、あの、あたたかい建物にやさしいまなざしをむける」のだ。

子どもたちと先生がいて、伝え学ぶ文化があり、その環境を支える人がいて、諍いも叱責も笑いも涙もあって、親たちのわが子の成長への願いに支えられている建物。そんな学校の原風景を、「クオーレ」はエンリーコ少年の成長する一年を通して描き出す。

学校には詩がある。この言葉を聞くと、殺伐としたものさえはらむ、いまの学校は、あまりにもかけ離れてきてしまったようだ。「クオーレ」の発表は、1886年。祖国愛を説く挿話は独立戦争期のイタリアへの理解が必要だが、そこに描かれる物語は、130年の時を超えて、私たちに「学校とは何か」を問いかけてくる。

## 目次

ひと言	千葉 建夫	1
いま学校に求められていること		
第一部 今日学校教育をどう見るか	数見 隆生	2
第二部 中森孜郎先生から		
「教育実践の創造」の話を聞く		6
授業をつくる		
子どもも教師も「いのち輝く教材開発・授業づくり」に挑戦しよう！	高橋 達郎	10
授業「いのち・からだの学習」づくりと実践から見えてきたこと	千葉 保夫	14
教育時評		
変形労働時間と教員定数	宮澤 孝子	18
子どもと学校		
個として向かい合う	虹乃美稀子	19
わたしの出会った先生 28		
見ていてくれたんだ	多田 博茂	21
相談センター報告 第18回		
相談センターでの学習活動	寺沢 幹緒	22
おすすめ映画		
「i 新聞記者ドキュメント」を観て	鈴木 吉雄	24
センターの動き		24
表紙写真：菅井 仁		
題字：江島 隆二		

# いま学校に求められていること

子どもにとって学校とは

—「教育実践」の火を消してしまわないために—

## 第一部 今日为学校教育をどう見るか

センター代表運営委員 数見隆生

### 1 今、子どもたちの現実、学校に教育本来の役割を求めている

ここ数年で相次いで発生した仙台市内小・中学校でのいじめによる自死問題、それに対する第三者委員会の答申やそれを受けての市教委の提言を読んで感じることは、そのほとんどが「再発防止」の対処策にすぎないことです。例えば、いじめ防止対策チェックシートの確認を徹底し、その考え方や対策の浸透を図る。いじめに関する研修を徹底し理解の浸透を図る。いじめ対策ハンドブックの再確認を各学校に徹底する等であり、それで学校でのいじめ防止の雰囲気づくりをするのだと書かれています。そして、学校として直接やるべきことは「いじめ防止の校内体制づくり」「加害生徒への指導」「体罰や不適切指導の防止」「小・中の引き継ぎ」「被害関係者への援助」だと述べています。まさに議会対応の文面ですが、それが各学校に配られたようです。

この答申や提言を読んできわめて残念なのは、子ども同士の関係性が崩れ、生命に関わる重大事態が発生してい



るにもかかわらず、それを教育問題と捉え、いま学校はどんな教育を行い、どういう子どもの人格や関係性を育むべきなのか、といった教育機関としての発想や視点が全く欠落していることです。いじめの根本要因が学校かどうかは別問題としても、今の子ども間に信頼関係が育ちにくく、いがみ合い、傷つけ合う関係になっていることは事実であり、それを深く考察しつつ「共生」しうる人格と関係性を育むことこそ教育ではないのか、個々の教師はもちろん学校関係者が共同して「今日的教育の問い直し」をすべきでないのか、と切に思っています。

子どもたちの中に多数の不登校生や教室に行かない子が生じ、学校が楽しくないと感じる子が増加しているのも同質の問題だと感じるので。学校に行つて友達に会えるのが嬉しい、先生や友達と皆で遊んだり学べるのが楽しい、だから朝早く起きて早く学校に行こう、と思える状況の学校では、たぶん不登校やいじめといった問題は起きないように思うのです。

義務教育段階の学校の本来的、基本的機能は、人間として生きるための基礎・基本の素養を学び、自立と共生といった人間的・人格的な発達を育むことにあるといえます。今その点を問い直し、共有することが強く求められていると思うのです。その努力をしている学校も少なからずあると思いますが、そういう学校づくりの実践がしづらくなっている状況こそ問題でしょう。

## 2. 子どもの困難に寄り添い励ます教師の仕事がしづらくなっている背景

子どもたちの中に様々な生きづらさや悩みを抱えている子が存在していますが、もちろんその要因はすべて学校にあるわけではありません。しかし、それらの子を支援し、励まし合い、協力し合う人間性と関係性を育てるのは教師の役割であり教育という仕事であることは間違いないと思います。いつの時代にも、生きづらさや悩みを抱える子はいたけれど、学校の教師たちはそうした子どもたちや事態と向き合い、様々な教育的支援や取り組みをし、それを乗り越える子どもの状況を生み出してきたと思うのです。それが「生活綴り方教育」であったり「生活指導」「集団づくり」といった子どもの現実に対峙した実践的取り組みでした。今問題なのは、そうした子どもの様々な困難や問題と向き合い、それらの課題に対し教育的な努力によって子どもを育て解決しようとする創造的取り組みがしづらくなっているところに深刻な問題状況があるように思われてならないのです。

教師の多忙さが問題視されていますが、そうさせているものは何なのか、多少の多忙さがあってもその教育活動に生きがいや満足感が得られない状況になっているのはなぜなのか、個々の教師の仕事に自由と余裕がなく、満足しうる仕事ができない現実があるなら、それこそが問題でしょう。子どもと共に創造的な教育実践を生み出すよう





な学校に再生しなければなりません。

ここ20年ぐらい前までの学校現場では、「教育実践」とか「授業実践」という言葉が当たり前のように使われ、それが議論され学び合われていたように思うのです。「〇〇先生の実践はスゴイ、私もああいう授業をしてみたい、ぜひあの教材に挑戦してみたい」「あの発問で子どもたちの思考はグッと深まった」「あの曲を合唱することで子どもたちの心は一つになった」「あの総合学習の活動で本音を出し合えるようになり関係性がすごく深まった」といったような話ですが、そういう実践創造が語られなくなってきた状況と不登校やいじめ問題が多発してきた現象は関係ないのでしょうか。教育から「実践観」や「実践創造」を喪失させてきたものは一体何なのでしょう。

日本の公教育は、明治になり時の政府の富国強兵策の一環として始まり、お国のために役立つ「人材」養成が目的でした。戦時体制になると、多くの子どもを戦場に送り出す任務も教育は担わされました。戦後になると、戦災からの復興と新たな世界の経済競争に勝ち抜く「人材」の養成が教育に求められ、最近では世界の学力テスト競争に遅れまいとする流れの中に、日本の教育は巻き込まれている状況があります。「〇〇県の学力テスト結果はワースト」といったランキング競争で煽り、数値で測る学力を至上のものとする学校教育の雰囲気醸し出し、文部行政、地方の教育行政、そして各学校の管理職や職階制のトップ・ダウン組織による画一化した教育活動（「スタンダード」方式という学習や生活規律主義による指導）の流れが急速に広がりました。

他方で、社会的な要請を受ける形で導入されたインクルーシブ教育（障害者との共生の基礎を育む教育）の動向も、そのための十分な教育体制が準備されず、他方での競い合いの選別的学力テスト体制との矛盾に遭遇し、一層の生きづらさに直面しているように思われます。つまり、今日の教育活動の二つの流れは、競争の論理と共生の論理という相矛盾する教育観の中で取り組まれていて、熱意ある教師たちの中に葛藤やバッティングをもたらす、共同を妨げているように思えるからです。例えば、生きづらさを抱えて保健室に来室した子への養護教諭の寄り添いや支援の活動に、「甘やかすな」「抱え込むな」「居心地良くするな」とまで言わしめる状況があると聞きます。教師たちの同僚性に溝をつくり、そうした状況が個性や創造性の発揮できない環境にしてしまっているとすれば、教師自身の教育意欲を損ない、子どもたちに楽しい教育活動を生み出すことも困難でしょう。

### 3. 「教育実践」の創造をどう捉え、どう再構築していけばいいのか

この東北の地、とりわけ宮城県の教育界は、戦後は全国でも有数の教育実践を創出する宝庫でした。1952年から宮城県に始まった東北民教研、多い年は2000名を超える東北6県の教師が結集し、自主的に自分（たち）



の創造した実践を持ち寄って意見を交わし、子どもたちの人間を育む教育活動を現場サイドから創っていかうとしたのです。その活動は先のような上からの管理主義的教育状況のもとでかなり低迷しつつあるものの、今も続いているし70年間近くその実践づくりの火はまだ燃え続けています。宮城県では、教職員組合の教文部が1962年4月に機関誌『教育文化』を発刊し始め、毎月県内各地の創造的な教育実践を掲載しつつ、終刊（2008年3月）まで実に46年間に492号を出しています。それだけではありません。宮城民教連が1984年から2007年まで24年間刊行した機関誌『カマロード』にも情熱的な宮城の教師の創意的実践が数多く掲載されています。こうした教育実践の創造はどうして生み出されたのでしょうか。逆にそうした実践の創造がどうして困難になつてきたのでしょうか。

百歳にして昨年人生を閉じられた太田堯先生は、遺言的な言葉として「教育はいま相当の危機状態にある」「教育に無関心でいると、とんでもないことになりますよ」と言い残されました。上（国）から「人材」の育成を押し付ける教育ではなく、ヒトが人間になる、可能性ある一人ひとりのいのちを支援し開花させる教育の追究を願われたのです。

教育で「実践」をする（教育実践の創造）ということとは、現状の子どもたちに寄り添い、一人ひとりの課題と可能性を見出し、その子（たち）の可能性に意識的に働きかけ、その結果どういう成長や発達が見られたのか、を考察し検証することです。どんな教材を使い、どういう工夫をして働きかけたのか、そこにどんな有効性があったのか、子ども（たち）の事実（変化）に基づいてそこにある教育原則を共有化していこうとする取り組みです。学習指導要領に沿った教科書内容を、学習スタンダード方式での教師でもどの子どもにも同様に教えようとする画一的指導とは全く異なるものです。子どもの教育に情熱を持つ一人の教師としての、創意ある個性的な課題意識のもとに、授業や教育活動を協力しあう教師集団のもとで展開されるべきもの、それが教育実践なのです。

いま個々の教師には、ゆとりのない多忙さと自由にならない学校環境のもとで、実践創造の余裕はなかなか作り出せない状況にあると考えられますが、そうした状況に埋もれたり、流されたりしないためには、教師であるという自分を見失わないこと、そして子どもの可能性を信じ、個性的な関わりを追求することだと思つたのです。そこで、次に第二部として、太田堯先生に学び、自らも学校現場や女子少年院に通い、教育実践の創出をされてきた中森孜郎先生に「実践創造の可能性」について、話をうかがつてみたいと思います。



## 第二部 中森孜郎先生から「教育実践の創造」の話を聞く

話し手：中 森 孜 郎（元センター所長）

聞き手：数 見 隆 生

### 数見

中森先生は、1970年代の半ばに宮城教育大学の附属小学校の校長を兼務され、その3年間で当時の教職員と一緒に創造的な実践をされ、その成果を『宮城教育大学附属小の教育』（国土社）にまとめられています。また、1980年に入ると白石市にある白川小学校の先生たちと一緒に創造的な学校づくりの実践を『表現にいだむ子ら』（きた出版）にまとめられました。さらには、宮城教育大学の教員であった1980年代から仙台市にある女子少年院・青葉女子学園で教育活動を重ね、2008年に『よみがえれ 少年院の少女たち』（かもがわ出版）を出版されています。

今日はそうした教育実践体験をもとに、いま学校で実践の創出が困難になっている問題やそうした実践創造の持つ意義、どうすればそうした実践創造を生み出せるのか、といった課題についてお聞きしたいと思います。まず最初に、近年、学校での実践ということが困難になってきている状況や背景について先生はどう考えられていますか？

**中森** 最近の学校に大きな影響を及ぼしたのは、2006年に教育基本法が変えられたことです。改悪される前は教育基本法の第10条で「教育は不当な支配に服することなく、国民全体に対し直接に責任を負って行われるべきもの」とあり、「教育行政は、この自覚のもとに、教育の目的を遂行するに必要な諸条件の整備確立を目標と

して行われなければならない」とあるのに、教育の条件整備に専念しないで、教育の内容や方法にも干渉するようになりました。それ以来、学力テストが始まるわけですから、学力テストを中心に、すべての教育施策なり各学校の教育が行政ルートから各学校の管理職を通してトップ・ダウンでなされるようになりました。ここに一番根本的な転換があったということだと思います。しかし、そうした危機感は、多くの教師や国民にも意識されていないように思います。もともとテストは教



育につきものですが、それは教師が子どもに教えたことがどれだけ理解され定着したかを確かめ、その不足を補い、また反省するためのものなのです。つまり、あくまでも子どもと教師のためのものです。行政が行う学力テストなどとしても、実態を調査し、その結果に基づいて教育諸条件を整備したり、学習指導要領を改善するためのものであるべきなのです。

ところが、今、文科省が教育現場に押しつけている学力テストは、それとは全く異質なもので、全国の都道府県や市町村の学校を競い合わせ、政財界の求める一部の人材を養成し、選別することが目的になっていきます。この競争が毎年激しくなり、学校や教師はその下請けになり、疲れ果て、子ども共々疲弊し、様々な心身の問題や問題行動に表れているのが実状です。子どものいじめや自殺、教師の過労と精神疾患の多さはそのことを物語っています。

遠山啓さんがかつて「学校は楽しいところでなければならぬ、という大原則が忘れられている」と言いましたが、まさにその通りです。私も本来教育とは何か、どうあるべきかを、共に考えるべきときだと思っています。それは子どもの基本的な人権に関わることですから。

## 数見

教育実践という現場からの創造的な取り組みが困難になっている背景にそうした政策的問題があることを私も感じているのですが、同時にそうした困難があるとしても子どもたちの立場に立ち、自分なりの教育活動ができることからやってみていきたいと考えたときに、大事なことは何なのか、それを先生に聞きたいのです。先生はかつて附属小学校で同僚の先生たちと教育の創造的な活動をしたと考へ、次のようなことを前掲の著書で述べています。「教育という仕事は本質的にはきわめて創造的な営みであり、そう願わない教師はいないはずである」「けれども、それは、また、極めて日常的な営みであるために、惰性に流れ、形式主義に陥ってしまう危険性を常にはらんでいる。どんな創造的な教育もひとたびその形式が固定化し、ルーチン化してしまうと、当初の新鮮さは失われ、教育として

の生命(いのち)は衰微してしまう」と。しかし今の教育はまさにルーチン化(スタンダード化)し、多くの学校はどっぷりつかってしまったています。

先生は、わずか3年間たったけれど「実践という教育の創造、つまり子どもと教師たちの作り出した新しい事実からどんなに多くのことを学んだかわからない」と書いています。先生は教育や実践というものをどう捉えていたのか、その辺を話してください。

## 中森

校長になって1年目はまず子どもの様子や教育の実態を見ることにしました。そして2年目になった時に、1年目に観察した子どもたちの実態から、教育目標に「たくましくしかもしなやかな子ども」というねらいを掲げ、授業と行事を中心に、その探究と創造の実践を行いました。具体的には、先生たちが一番子どもと一緒に組み組みたものをそれぞれ自由に組み組める「白わく」の時間というのを設けたのです。当時は「ゆとり教育」時代でもあり、自由裁量枠(これは後に「総合的学習の時間」になる)の中でそれぞれの得意な分野の教育実践に取り組みました。それから行事としては「全校合唱の会」と「表現する体育祭」の二大行事に特化し、どちらも感動のある質の高い内容のものに限定したのです。もちろん普段の教科の時間も大事だけれども、教育実践というのは、それぞれの学校の中で、先生たちが目の前の子どもたちと一緒にこれをやりたいというのがやれるようにすることこそが大事だと考えたのです。

## 数見

先生が校長時代に掲げた教育目標「からだも心もたくましくしかもしなやかな子ども」は、40数年たった今も継承されていますし、「朝の活動」や「全校合唱の会」は今も附属小の大事な教育活動として引き継がれています。40年以上も継承されているということは先見の明があり、それなりの実践的価値が大だったからだと思いますが、その点についてどう思いますか？

## 中森

こういう教育目標を掲げたのは、当時の先生方は皆な若くて非常に教育熱心だったけれど、どちらかというと子どもに気合を入れ頑張らせるというもので、教育の方向性が明確でなく、子どもたちが



受身であつて心身ともに硬直しているように思えたのです。教師と子ども、子ども同士の間関係も含めて。それで、こういう教育目標を提案し、創造的な教育活動の中でその中身を創っていきました。「朝の活動」は始業前の30分ほどの時間に、教師も全員参加して朝の心身のウォーミングアップを兼ね、校庭やグラウンド・体育館等を使って様々な身体活動や合唱活動を学年ごとクラスごと、また「附小体操」を作つて全校でやることもしました。このことで、先生と子ども、子ども同士の能動的な活動やしなやかな関係性が生まれてきました。「白樫」時間の活動では、畑をつくり、カブや大根を栽培したり、麦を育てパン作りをしたり、学年によつては演劇やオペレッタをするなど様々でした。今も行われている合唱の会は、すべての担任が指揮をし、各クラス、学年、全校の合唱を一日がかりの学校行事として行い、子どもたちと教師が一体となり、心を込めて声を響かせ合う教育活動です。私が関わつたのはわずか3年間でですが、その中で創造的実践の中にある有効な活動がこれまで引き継がれてきたのだと思います。

**教見** 先生はその後、白川小学校の実践にも深く関わられ、主に表現の教育を中心としたすばらしい「学校づくり」に協力されました。そのきっかけは何だったのか、そして小学校における表現の教育の意義というものをどのように考えられてきたのですか？

**中森** 白川小では、それまでは国語の読解を中心にやっていたのですが、僕が行くようになるころから体育とか音楽とか、オペレッタとか詩の朗読など、表現教育の方にくつと力を入れるようになってきました。体育でもスポーツというのではなく体操とかマット運動や跳び箱、縄を使った運動など演技として自分（たち）を表現するのです。合唱やオペレッタも仲間と呼吸を合わせ、心を一つにして自分を表現します。詩の朗読も自分の解釈やイメージを抱いて、みんなの前で心を開いて読み上げます。ぶち合わせ太鼓もやりました。そしてこうした内容を学校行事として保護者や他校の先生たちを含む大勢の参観者の前で演じ、表現し、拍手を受けるのです。

こうした教育活動を積み重ねる中で、子どもたちは学校に行くのが楽しくて仕方がなく、朝も早くから学校にくる。上学年の子どもたちが取り組んでいるのを見て、下学年の子どもは憧れを持つようになる。自分も何年生になったらこういうことをやるんだ、という憧れと自信を持つようになっていく。そういう子どもたちが育っていきます。自分と仲間が力を合わせて技ができるようになり、きれいに・上手に演じ表現し、それが多くの人に認められる、そういう活動が子どもを成長させ、人間関係を深いものにしていくのでした。

こういう教育活動も、特に体育活動や表現教育に秀でた教師がいたからではなく、普通の学校であり、中高校や女性の先生もいて、子どもたちの前で、演じるマット運動や器械運動のを見本を見せるわけではなかったけれど、私たちと一緒に指導をする中で、子どもたちの要求に応えるような指導ができるようになっていくわけです。

また、もちろん白川小学校では、国語や算数、理科、社会といった認識の教育にも手抜きをせずに熱心に取り組んでいたけれども、小学校段階ではとりわけ表現の教育は大事と考えたのです。つまり、自分の周りを認識する教育と同時に、外部に自分を表現する教育もあつて子どもの中に人間的なものが育つていくと考えたのです。

**教見** 近年の学力テスト主義の教育状況のもとでは、小学校段階からこうした表現の教育が軽視されてしまつていますね。子どもを人間として成長・発達させるきわめて大事な、本質的な教育活動が奪われてきているというか、しぼんでしまつていくように感じます。

ところで、先生は更に青葉女子学園という成長・発達の過程でつまずき、挫折を味わい、矯正教育の途上にある少女たちと1983年から20年間近く関わることになりました。そこでも先生は心身のほぐしや様々な表現の教育活動を行い、そうした少女たちの心身のしなやかさや解放、人間的な発達、他者との信頼関係や結びつきを呼び起こしています。先生は「表現とは生きる」と言っているように、まさに生きていく実感をつくり戻させる活動だったように思います。その点についてもちょっと話してください。



中森

青葉女子学園では、大学でやっていた「からだと表現・ことばと表現」や「日本の芸能」「創作オペレッタ」などを生かした授業をやりました。具体的には、中森体育と言われた「からだほぐしや縄を使った体操」、詩の朗読、和太鼓、御神楽（おどり）、オペレッタなどの表現の教育です。ここに入所してくる子どもたちは、十分な養育を受けられず、つらい育ちをし、学校でも学習につまずき、不登校や非行に至った子どもたちです。仲間や大人にもなじめず信頼関係の持てない形で入所しています。だから当初は硬くて閉ざした身体や心、ぎこちない動きや対応、自信の無さからくる小さい声やはつきりしない発語、などが特徴でした。

こうした人生を背負ってきた子だからこそ、様々な表現活動が生かされ、少しずつ心とからだを開き、教師との関係、生徒同士の関係もつくられていき、大きく変化していきました。自分のからだで、声で、言葉で表現する。そうした表現の手段を得た少女らは伝えたい気持ちや心の内面を人に伝え、認められ、関係性を築き、信頼感を得ていきます。そして仲間の大切さを感じ、生きている実感や希望を少しずつ取り戻していくのです。特に、実践発表の場で参加者から拍手をもらったり、オペレッタや太鼓、御神楽、詩の朗読等を目の当たりにし、感動した親と涙して交流する行事体験は、まさに「人間教育」と言えるものでした。

毎回彼女たちと授業で表現活動をやるのだけど、彼女たちがその時間毎にいろんなことができるようになり、可能性が開かれてくると、この次は何をやるんだろうと次の時間を待ち望むようになるんです。授業が終わって私が帰るときには別れを惜しんで手を振ってくれるようになる。あとで感想文を見ると授業のことについて感じたり考えたりしたことをたくさん書くようになる。それを読んで私も嬉しくなり、学園に行くと子どもたちが待っていてくれる。私にとっても毎回の彼女たちとの出会いの中で発見があり、教育実習のようなものでした。

数見

ありがとうございます。長くなっちゃったのですが、最後に、

学校という場は本来どういう場であるべきなのか、そこで営まれる教育活動は教師にとってどういう営みであるべきなのか、これまで現場の先生たちと一緒にやって「教育実践」をしてきた先生からまとめの提言をお願いします。

中森

本来、子どもにとって学校は楽しいはずのところなんです。それが、楽しくない場になってきている。そのことが原因になっていく問題など、欲求不満を解消する形で全国的に問題になってきているのだと思います。今学校に、何か大事な教育の本質的なものの何か欠けてしまっている。そのところに気づかなくてはいけない。学校は教育の場だけど、はたして今行っている学力テスト的な教育、学習スタンダードと言っているような授業は真の教育と言えるのかどうか、むしろ反教育になってしまっているのではないですか。

私は1970年代に大学に赴任した頃から心の支えにしてきたのは、東大学生時代に恩師でもある勝田守一先生の「教育というのは、一種の心の発明による典型的な実践を創造することなしに発展はない」という言葉でした。だから、教育実践というのは、教師が子どもたちと一緒に授業や行事を創っていくこと、新しい事実を創造していくことなんです。教師と子どもたちが一時間一時間の授業や行事において一緒に課題を追究する同志として取り組み、子どもはもちろん教師もその中で発見があり、気づきがあり変わっていく、成長していくものなのです。学力テストで競争させ鑄型にはめ込んでいくスタンダード方式の教育とは異質なものであり、一人ひとりの個性を開花させる教育実践の火を決して消してはならないと思っています。

## 子どもも教師も「いのち輝く教材開発・授業づくり」

に挑戦しよう！

高橋達郎

## 1, 宮城教育大学での「教職入門」講義

いま、私は宮城教育大学の1年生約100名の学生を相手に必修「教職入門」の講義を担当している。今年で8年目。今年は、12月から1月の2か月の5回。

第1回は『子どもと自分の発達の可能性に挑む』。私が子どもたちと作ってきた主にもづくりの授業紹介。そして、竹とんぼ（づらとんぼ）づくり体験、それを利用した作文教育。それから、親子で手づくりした中南米の民族楽器「ケーナ」で演奏会、手づくりの織機でマフラー織りの授業と実演など。竹とんぼを初めて作る学生、なぜ飛ぶか、「ひねり」を知らない学生が少なからずいて驚く。ものづくりと遊びの教育的意義を確認。

第2回は『明日の授業が楽しみです』。たいへんな1・2年生での授業づくり。替え歌で学校生活を教え、「はてなボックス」でみんなで考え合う授業の体験。その後、児童が作った発火器30台で、学生100人がグループに分かれて火起こし体験。興奮する学生。

第3回は『授業・教材づくりの楽しさ』で社会科学歴史の授業づくり。はじめに私が30数年前に描いた実物大のナウマン象の絵を教室に張り出し、発掘で出土した骨・石器などから当時の日本人の祖

先を考える考古学の授業の体験。次に「白石市史誌」にある戦没者1602名の名簿。それを拡大コピーして巻物にする。その資料を基に、戦死した年月日と場所の資料を使った調べ学習。さらに半年にわたるヒロシマの原爆で亡くなった15万人分の顔写真集めと展示の学習。最後に学生には宿題とした200名分の顔写真集め。それをつなげて東日本大震災の犠牲者数、「2万人の顔」を目で見る体験。さらにその犠牲者の年齢と氏名を載せた名簿20数ページを各ページ模造紙大に拡大しつなげた名簿を見る体験。『数字は、実相と感情（悲しみ、生きたかった思い）を伝えない』学生の驚き、大震災への見方、とらえ方の転換……。『命を考えた時間』と書く学生。

第4回『授業でクラスと子どもが変わる』。最初に草野心平の『冬眠』と『蛙の詩』の鑑賞指導体験。そして、室生犀星の『5月』『靴下』の授業。『詩には『発見』『新しいものの見方』があること。後半は物語の授業。4年生の『世界一美しいほくの村』『こんぎつね』の授業で荒れて暴力的なクラスと子どもたちが、「このクラスはいいクラス」と詩に書くようになった話と、『注文の多い料理店』『海のいのち』『ヒロシマのうた』の「仕掛け」と「願い」の子どもたちの深い追求の話。子どもの「疑問」「自問自答」「自由起立発言」で学び合い。子どもの能力の高さに驚く学生。

第5回『子どもと教師のいのち輝け!』では、はじめ、様々なトラブルのあるクラスでの成長物語、「何がこの子をそうさせたか」「子どもたちから教えられてきたこと」「教師にとつて最も大切なこと」「命の別名はこころ」（中島みゆき）の意味」「教えるとは希望を語ること」（ルイ・アラゴン）の「希望」とは何か。私が担任した子どもたちの日記や私への手紙で紹介。幸せな教師人生がおくれたことを話して講義終了。リアルな話で、教職をめざす決意を固める学生。

## 2. 学生たちの疑問と学び「牛タン大会はできますか?」

講義の度に私は、感想や学んだこと。そして疑問・要望を書かせてきた。それを『ハトンゾーン』と題した学級だより(?)を発行出された疑問にも全て私の考えを書いて回答してきた。今年度もこんな感想が多く出された。

「授業のイメージ、教職のイメージが全く変わった」「こんなことを学校でしているのか」「小学校時代、こんな授業を受けたかった」「教員になったらこんな授業をしたい」など、初めての授業体験、子どもたちの成長と能力の高さなどに驚き、教職への興味・関心を抱く学生たち。

第2回目るとき、私が子どもの誕生会を毎月やってきて、その月に誕生日を迎える子どもたちの願いを実現してきた話をした。やりたいスポーツがあれば体育の時間に、作って食べたいものがあれば家庭科や学級会活動で実現してきた。ある女の子は、「私は流しそめんをやったことがない。一度、ぜひ体験したい。」それで学級会で話し合って、学校の近くの竹をみんなで取りに行つて、親に槌を作ってもらい実現した話をした。他に、一人、牛肉・豚肉・鶏肉の三種焼き肉大会や握り寿司を作り、子どもたちがテーブルを回つて取っていく「人間回る寿司大会」をした。

すると学生から、「子どもたちが学校で『牛タン大会』をしたい言つたとき、それはできますか?」と質問が出された。

私は、学生たちに答えた。

「できますが、それは、その活動にどんな教育的意味を見いだすかです。そして、それが見いだせたら、実際にどう実現させるか、案を作り、学年の先生や職場の同僚、校長先生や教頭先生、そしてPTAの役員さんや保護者に相談することです。牛タンは、仙台の名物です。地元の子どもとして、一度味わってみることは、大きな教育的意義がありますね。つまり、『ふるさと教育』として総合的な学習の時間として調べ学習をさせ、関係者にインタビューをして『牛タン新聞』を作らせ、発信させる。そこまでやれば、当然、味見をしなければならなくなるでしょう。私の火起こしも最初の角田小学校と次の越河小学校では、5・6年生で『原始の火で芋煮会をやろう』とこのことで学級活動と家庭科の実習として行いました。」

白川小学校では総合的な学習『昔の人の知恵に学ぶ・火起こしに挑戦しよう』として、指導主事訪問での研究授業として指導案を書き、火起こしの「すぐれた教材性」として次の5項目を掲げた。①摩擦熱を体感できる（理科）②古代人の知恵を学べる（社会科）③助け合い、協力の場面が生まれる（道徳、特別活動）④小さな火種から炎に変わる過程から、火の恐さを実感できる（安全教育）⑤製作する喜びがあり達成感がある（図工）そして、単元の目標としては「発火器を製作し、縄文土器を焼き、芋煮会をする」とした指導案を学生たちに配布した。

### ○ Y・Dさん

「教育的意義があれば、何でもやればいい」という言葉が心に残った。竹とんぼも火起こしも実際にやることで学べるのがたっさ





んあり、子どもたちに体験させたい。今の時代の授業は、情報機器を使用したり、社会のニーズにあわせているように見えるが、そこから学べることは何だろうかと講義を聴いていてふと思った。調べればいつでもどこでも何でも出てくる時代、学ぼう！知りたい！と思うことが少ない気がする。自分で作り、実際にやってみることで楽しく、かつ効果的に知識になるのだと思った。

### 3. 「教科書以外の教材を使っているのですか？」

そして第3回目の国語の授業に関してこんな質問が出された、「教科書以外で、子どもたちに読み深め、考えてほしい！と思うような詩や物語があったら、授業で取り上げてもよいのでしょうか。」私は答えた。

「もちろん、大丈夫です。今日授業した草野心平『冬眠』は教科書にはありません。『春の歌』は小学校3年生の教科書に載っていました。白い紙に「●」だけを書いた視覚詩『冬眠』の授業は、すばる教育双書1『荒野にめばえる』という本に載っていた私の尊敬する故遠藤惟也先生の「学級たより」にその授業記録の一部が載っていました。それを読んで私は「これは面白い、やってみよう」と思ったのです。でも、私の力では1時間持ちませんでした。そこで、この詩に関して草野心平の詩集を読み、全集も手に入れ、福島県の草野心平記念館にも数回足を運んだのです。そして、草野心平は、四季を通して蛙の詩を書いていました。これも子どもたちに伝えたいなあと思い、私は授業の前半に「冬眠」を考えさせ（読み取り）、後半に様々な蛙の詩を読み考えさせる1枚のプリントに作成したのです。4・5年生の初めての授業参観、冬眠の詩の授業を私は実践してきました。誰でも発言できて音読も楽しみ、詩についての理解を深める授業ができます。その姿を親たちが見て、考え楽しんだ授業となりました。教科書は「主たる教材集」で、使用義務はありますが、取捨選択、軽重を付けていいし、さらにその教材よりもクラスの子どもたちに適切と教師が判断すれば教科書以外の教材を使用してい

いのです。それは、教師にとっても子どもたちにとっても、とても大事なことです。」

### 4. 文科省の「反省」と学校「スタンダード」、そして、教師の教育権

#### 国語科「単元を貫く言語活動」の問題性と教訓

13年前に文部科学省が学校の教育内容の大綱を定めた学習指導要領で「全ての教科で言語活動が重視」とされた。国語科では「単元を貫く言語活動」と称して、教科書に入り、雑誌や官制の研修会で全国の学校現場で強制された。物語教材では、言語活動として「本の帯」や「リーフレット」づくりを目標に教材文を読ませ、読解はあさり」と本文をなぞって終わりとし、同時に「並行読書」として、教材と同様の本を読ませる指導がこれからの国語科指導、とした。文科省の国語調査官であった水戸部修治氏が提唱し、書店に並ぶ国語教育関係の本は「単元を貫く言語活動」を題名とした書籍で溢れた。

私の学校でもこの「単元を貫く言語活動」の職員研修が行われた。私はこの方法に疑問だった。そこで、退職前の2015年と2016年、宮城県教育委員会主催の国語研修を受けた。講師は水戸部氏。2015年、研修は教材が指定され「単元を貫く言語活動」の指導案づくりだった。私は一つの方法を押しつけるのはおかしいと思い、意見を述べ、私のやり方の指導案を提



出した。

ところが2016年には、講師は同じ水戸部氏だったが、「単元を貫く言語活動」という言葉が消えた。なぜだ。質問をした。しかし、まともな回答はなかった。そこで、私は県教育委員会に「単元を貫く言語活動」に関する文書の情報開示請求を行った。その結果、2015年11月6日付けの「全国指導主事会議」の文書が開示された。そこには、次のような文言があった。(重要なので引用する)

・本来、教育課程の編成や授業づくりの主体は各学校にあり、  
不断の授業改善は、特定の型を示すものではなく、各学校の教員一人一人による学習指導の不断の工夫改善を求めるものである。

・このため、文部科学省が「単元を貫く言語活動を位置つけた授業づくり」などの特定の実践事例に偏った発信をすることは、各学校における教育課程編成の自由度と創造性を狭めることに  
つながり、率直に反省する。

今後、文部科学省が、各教育委員会等に指導・助言等を行う際には、「単元を貫く言語活動」という用語及びそれに関連した「入れ子構造」「A B ワンセット方式」等の用語は使用しない。

・今後、授業改善の在り方について各学校等へ指導・助言等を行う際には、以下の対応をお願いしたい。(1) 各教員が、自ら考え、創意工夫することで、多様な取組が生まれるように指導・助言等を行うこと。(2) 各学校の教員一人一人による創意工夫により様々な手法が生み出されることは推奨される。「並行読書」「主文掲示・全文シート」、本の紹介リーフレット等の作品づくりなどの特定の手法に、各学校の授業が偏重することがないよう説明に留意する必要がある。こうした手法は、ある学校のある課題に対しては有効であっても、別の学校の別の課題に対しては有効でない場合があるため、特定の手法を画的に取り入れるのではなく、各学校や児童の実情や課題に応じて、授業改善の在り方を考えることが重要である。

文科省が「反省」の言葉を述べたのは、これが初めてではないか。そして、この文書は、教育行政が1つの方法を押しつけることの誤りを示している。県市町村教育委員会の「教育スタンダード」、各校の「授業・生活スタンダード」も同様でそれは誤りだ。

学校教育法37条に、「教諭は児童の教育をつかさどる」とある。目の前の子どもの実態から、教材を選び、教育方法、授業過程を決定する権限は、教諭＝学級担任にある。それは、国際的にもILOユネスコの「教員の地位に関する勧告」にも示されている国際的な教員の権利なのだ。教師の専門性はそこにある。目の前の子どもの姿を見て、教育課題をとらえ、それを乗り越えるための教育方法と教材を選ぶのは、教師の専門的な仕事なのだ。

## 5. 『パトゾーン』学生たちへの呼びかけ

～楽しい教材・授業づくりを学び、挑戦し、

幸せな教師人生を送ろう！～

私の講義に次のような感想があった。

○ F・Nさん

先生が楽しそうなのって、凄く大切なんだと思った。高橋先生が全力でとても楽しそうに講義をしていらして、こちらも笑顔になるし引き込まれる授業になるのだなと思った。(後略)

○ K・Lさん

教師が子どもたちに「教える」ときのパワーは、学習への「感動」から生まれるものだと感じた。先生が目輝かせながら「これ凄くない？」と感動している様子ほど、子どもの興味・関心を引き起こすものはないと思った。まずは、教師自身が楽しむことが大切なのだと思う。

今年4月から、小学校では、新しい学習指導要領が全面实施となり、特別な教科「道徳」や英語の教科化、プログラミング学習などが導

入され、1週間の授業時数が増やされる。学校の忙しさは一層深刻になることが予想される。その上に「学力テスト」体制と学校・授業・生活の「スタンダード」。これで、子どもたちと先生は「いのち」を輝かせることができるだろうか。

そうした状況の中でも、私は、子どもたちに学びの喜び、クラスで考え合い深め合う喜びを体験させたい。その姿を教師が体で感じ、教師としての喜びを味わってほしい。そのために、私は第5回目の

## 授業をつくる2

# 授業「いのち・からだの学習」づくりと

## 実践から見えてきたこと

最後に学生たちにこう呼びかけた。

「宮城はもちろん、全国の先輩教師たちが開発した優れた教材を学び、受け継ぎ、発展させて楽しい授業を生み出していこう！各教科で一つ、1年に一つ、自分が心動かされた事例・作品で教材を作り、子どもたちと授業を楽しもう。そうすれば、きっと自分も成長し、喜びの多い幸せな教師人生を送ることができるでしょう」と。

(白石・福岡小)

自分の感想や新たな疑問等を記録させた。

千葉 保夫

「いのち・人間のチカラと知恵―はじまりの物語」の授業

1時間目

「いのち・赤ちゃんのはじまり(1)」

資料(ワークシート①)(45分×2)

「どうしてお父さんは、赤ちゃんを産めないの?」(いのち・私のはじまり)

精巣・精子 卵巣・卵子 子宮 胎児の発育 胎盤とへその緒などの名称・働きと発育を知る。

2005年に勤務していた学校の校長より4年生の総合学習で「いのち」の学習を実施したので、グラウンドデザイン(授業全体計画と指導案作成含む)を作成し、その授業づくりと実践のために、4学年の先生方と協力してほしいと要請をされた。私は、詩「にんげんが海から生まれてから、おかあさんはなんばんめ?」熊田亘(福室小一年)(1991.8・14付読売新聞)という記事に触発され教材研究を続けてきた資料で授業の準備をし、「いのち」をテーマに5年間、授業実践研究を続ける機会となった。

その時の「いのち」の授業題名と計画・ワークシートを紹介する。

授業時間は、90分(45分×2コマ)を1コマとして、途中休憩を入れ、うち毎時間の後半に10分ぐらい確保し「学習ノート」に学習内容と



2時間目(1)

「いのち・私・人間のはじまり(2)」

資料〈ワークシート②-I〉(45分)

「私のはじまりは父母のはじまりは？ 父母の父母は？ 祖父母の父母をたどってみよう！」

「ヒト・人類のはじまりいのちのはじまり」自分の系図を書き、どこまでもたどってみるとどこへ行くかを考える。

2時間目(2)

「いのち・生き物のはじまり(3)」

資料〈ワークシート②-II〉(45分)

「人間・ブタ・ニワトリ・サケはどのように育つの？」

コッヘルが発生図から発生過程は極めて似ていることと、動物の生命誕生に共通点があることに気づく。

3時間目

「いのち・人間にチカラと知恵(4)」(いのち・人類の遺産)

ワークシート③(45分×2)

未来の自分の子どもを夢見て「生きる」道を選んだ青年と、右脳を喪失しても大学に学ぶ少年、結合双生児分離手術で生きる少女を紹介し生きること考える。

次の①～④文は、授業後の4年生の子どもたちの感想の一部と私の添えたコメントである。

①わかったことは、人間はねばり強く体に必要な物がなくても生きていけることが分かりました。疑問に思ったことは、人間が話すこと、聞くこと、見ることは、何から出来たのですか？

命のバトンは、一人一人の出会いから生まれると思っていまし

た。でも命のバトンを次の子へわたすのはとてもむずかしいと思うことが出来ました。子どもが生まれるによつて、命のバトンが次にわたせるといいと思いました。命のバトンは、いつでもバトンタッチしながら走っていると思いました。(T)

■Tさんへ、人間がどうして話したり聞いたり見たりできるようになったのかという問いは、とてもよい問いだね、いっしょに考えたいね。「命のバトン」という言い方もとてもわかりやすくすばらしい。バトンが負担にならないといいな。

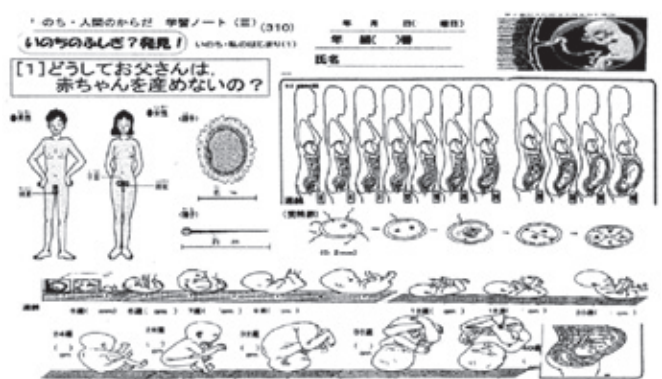
②せんぞは、何人にもつづいていることがわかった。一つの命がわかれていろいろな命になっていくというのを考えると今ここにいることが一つのきせきだった。もしお父さんとお母さんがなくなっていたら自分はいなかった。(K)

■先祖がいて父母がいて、命は分かれながらもつながっている。自分がいることが奇跡と思われる命を大事に生き抜いてほしい。Kさんはきつと力の限り生きぬいてくれると思う。

③にんげんにはいろいろふじゅうをもっている人がいっぱいいるんだなあとおもいました。人げんにはさいごだめたとおもったらしんでしまふ。いきるぞ！とずつとずつとおもっていたらいけるということがにんげんにはで



〈ワークシート②-I〉



〈ワークシート①〉

きるということをまなびました。げんじんがいなかったらもうほかたちはいないとゆうことおしえてくれました。おもしろかったです。おとなになつたらいいおとうさんになりたい。ぼくみたいなこどもに（辛い思いをさせない）なつてほしくない。（K）

■父親に虐待を受け苦しんでいたK君が、その状況を乗り越えようとしています。自分のような経験をする子どもがなくなつてほしい。そんな父親をめざして生きるぞと願ひ續けていきたいと決意している。

④たくさんのじかんをかけてしんかをつづけてきた。しょうがいをもちながら生きている人もいる。世界の人々が豊かなせかいをめざしてがんばる人もいる。自分たちがこれからのことを考えて、豊かな地球になつてほしいと思う。だから命をむだにしないで、あきらめないようにしたらいと思ひました。ぼくは、地球のみんなに命のたいせつさを伝えたいです。（Y）

■Y君は、学校でいじめられ死にたいという「い書」を書いて母親・担任を心配させました。「いのち」の学習後に、人間が進化しながら発達してきた歴史に驚き命のすばらしさと無駄にしない、大切さを伝えたいと綴っている。母親も担任もこの感想文を読み安堵していた。

次の⑤⑦文は、非常勤講師をしていた大学での「いのち・からだ」の授業で、子どもたちの授業のようす・感想を紹介し、「いのち」の授業づくりの演習後のM大・F大・H大の学生の感想の一部である。

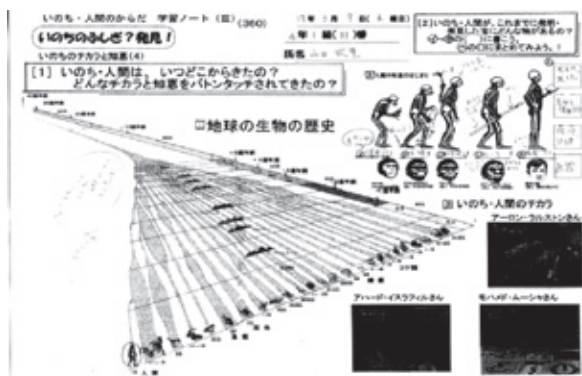
⑤私は小さい頃から、教育虐待を父と祖母から受けていて、いじめも受けて、今は摂食障害で苦しんでいて二人をにくみ、死にたいって思つた時期もあったけど、ちゃんと生きて結婚して子どもを幸せに、そして未来までつなげていきたいと思つた授業だった。父・母、

先祖代々のおかげで今の自分がいると改めて思えたので、自分を含め一人一人を大切にしていこうと思う。（S）

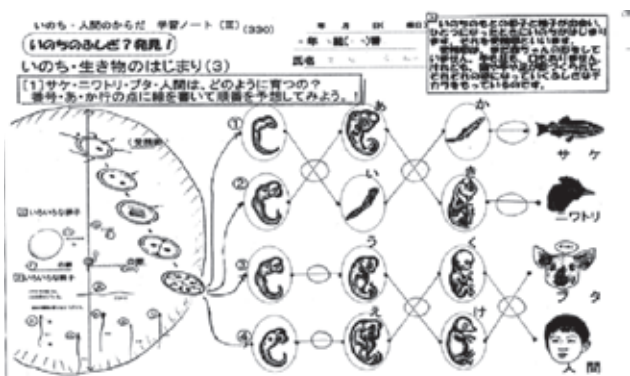
■Sさんは、授業後に自分の厳しい体験を書き綴り、さらに乗り越えようとしている。自己を変革する機会となっている。命のつながりと今の自分の存在の貴重さに気づき、前に歩み始めたSさんに大きな拍手を送りたい。

⑥大学に入ってから何度か「いのち」について学んできましたが、その中でも一番印象的でした。先日私の母校で女の子が首つり自殺をしました。神奈川県では、小学6年生の女兒が兄によつて妊娠させられました。もっと早くから、こうした授業や話をしてたら、防ぐことができたのではないのかなと悔しい気持ちも生まれました。養護教諭として学校の子どもたちみんなが自分の命も周りの人の命を大切にしようとする気持ちを育てるために、私自身ももっと多くのことを学ぶ必要があると痛感しました。（M）

■Mさんへ 教師は、子どもの苦悩や喜びに寄り添い、新しい知見を掘り起し学び、未来に生きる喜びを分かち合い語り合うこと。そのためにどんな内容を授業で提案するかを探求し続けることが教師のもっとも大事な仕事と思う。そのためには自由と責任が伴うが、仲間と先人と人類の歴史・文化を共に語り学び続けるこ



〈ワークシート③〉



〈ワークシート②—Ⅱ〉

とが大事なな。

⑦自分の家は母子家庭で、父親のことはほとんど知らないが、自分が生まれたのは母方の先祖だけでなく、父方の先祖も必要なので感謝しなければならぬと思った。人の流れは、不思議で一人でも欠けたら自分は成り立たないことがわかった。(N)

■Nさんはこの授業後に自分の生い立ち・生きづらさを書き綴って、次のステップへ歩み始めている。こうした切り替えは、他人が強制してできることはない。多くの指導という強制は、力にならないが、自ら気づき歩み始めた一歩は、確かな未来を築く底力になると思っている。

「いのち」の授業内容を紹介する枚数は、もうない。この授業では、受精卵の発生図やニルソン氏の胎児の発生映像、家系図、生命史人類進化史の図やサケの産卵・死骸の映像など専門家の力を借りて学習内容を掘り起し教材化し活用している。教師が、子どもたちの実態・要望に応え何を教材化して学習内容に仕上げていくかは、極めて大事な仕事である。授業を通して子どもたちがその内容の理に学び、気づき触発されて自己変革をしていくことができるのかは、授業テーマ・内容、全体計画等を設定する教師の責務である。授業の核心は学習内容であり、その内容をどのように提起し探求するかは、教師の重要な仕事である。

私は、中森孜郎さん(元センター代表委員)・数見隆生さん(現センター代表委員)・三浦良喜さん(元教員)をはじめとした先輩や同僚の力を借りて教育内容を研究することができた。国が教育内容を規制する時代ではない。そして自由な教育実践研究の場で学級での授業実践のレポートを書き検討をしていただき、授業づくりを学び続けてきた。こうした学びの場には「機能平等」の精神があり、真理を求めるときには、年齢・職域を超えた探求の姿勢があり、自由闊達な意見を語り合い、本音で学びあうことができた。

その中で私が学んだことは、子どもの生活の事実から課題を見つけ出して「授業」の内容を創造すること。そして教師としての授業の目標・願い・期待を書き綴り、授業全体計画を立案し授業実践を記録し、仲間たちと自由に討議し、その成果・課題を次の実践にかすことであった。

この授業づくりの仕事は、鎌田克信さん(東北福祉大)の「いのち」(小5)学習や制野俊弘さん(和光大)の「命ある教室」(中学生)へ発展し生かされている。これらは、東日本大震災を体験した子どもたちの被災事実に寄り添い、子どもたちの苦悩を学級の仲間ですら感じながら「命って一つしかない」「死んでも私の心の中で生きていく」ということを仲間と共に学び気づきそれぞれが自己変革していく学びのある授業実践となり、被災地宮城の貴重な教育実践のモデルになっている。

学校現場での対応のまずさ等で、子どもたちが自死する事件など、学校で絶対にあつてはならないことが起こっている。選別差別を拡大し固定する過度の受験教育や全国学力テストのシステム等は、本来の教育ではない。子どもたちのためになつていないし、子どもたちは望んでもいない。すぐに廃止されるべきである。

今を生きる子どもたちが未来に生きるためにどんな学習が必要かを考え、自由に学習内容・プログラム等を開発することは、教師の核心の仕事である。その授業内容で子どもが自己変革を展開し、一人ひとりが歩き始められた授業は、教師冥利に尽きる。その道の専門家たちの力を借り、多くの教師仲間と力を合わせ、未来の子どもたちのための「教育の仕事」を創造してほしい。教師と保護者と子どもたちの声を聞き、共に創造する「教育」システムの確立と教師たちの自由な授業実践研究は未来を生きる子どもたちのための最善の方策となる。

(元教員)



## 変形労働時間と

## 教員定数

宮澤 孝子

## 1 「働き方」の問題なのか？

「働き方改革」という言葉が蔓延している。改革の一環として、教員に変形労働時間制を取り入れるべく、今月、公立の義務教育諸学校等の教職員の給与等に関する特別措置法（給特法）が改正された。改正理由には、「……働き方改革を推進するため……一年単位の変形労働時間制を条例により実施できるようにする」とある。ところで、そもそもその問題は、「働き方」なのだろうか。問われるべきは、「長時間労働」の実態であったはずだ。

## 2 「長時間労働」の原因として問われるべき「学級定員数」

教師の長時間労働の問題は、1950年代に文部省によって一度だけ取り組まれたことがある。

しかし、それ以降今日に至るまで、問題解決につながる調査や改革はほぼなされてこなかったといえる。では、今日において再び脚光を浴び始めた「教師の長時間労働」の原因は、何だろうか。原因は他にも多くあることを断った上で、ここでは主に学級定員数に限定して考えてみたい。

日本における学級定員数は、未だに40人が標準だ。全国各地において少人数学級編成の必要性が叫ばれているなかで、独自に35人学級や30人学級を導入する自治体は増えている。しかし、そもそも学級規模は各自治体の裁量に任せて良いものなのだろうか。ある地域では40人学級、ある地域では30人学級、これでは教育の機械均等保障原則にそぐわないのではないか。加えて、自治体独自の責任で学級規模を小さくしようとすれば、その分教員が必要になる。つまり、自治体だけで小人数学級を行うには財政上の限界がある。学級定員数が多いまま、学習内容や業務は増えているのだから、忙しくなることは誰の目にも明らかではない

だろうか。ちなみに欧米諸国においては、学級定員数は多くても30人が標準規模とされている。

「学級定員数」を小さくする代わりによく耳にするのが、部活指導や学校ボランティアなどにあたるための外部人材を雇用しようという対策である。一見、学校現場に人が増えることは歓迎されそうだが、その場しのぎ的な施策に終始しかねない。「外部人材を雇用する費用は誰が負担するのか」、「外部の人と連絡を取るのには結局教員なのだから、教員の業務はかえって増えるのではないか」、「そもそも全ての地域でそのような人材を確保できるのか」……。これらは全て、授業中に大学生から出された意見だ。これらの質問に、国は答えられるのだろうか。

## 3 「変形労働時間制」ではなく、実態に沿った「教育条件の整備」を

「みなさん働き過ぎなので、変形労働時間制にしてあげますね。あとは意識を改めて仕事を乗り切ってくださいね。」と言われても、目

の前にある業務量が減るわけではない上に、長時間労働問題への応答になっていない。教職員個人や学校単位の努力で解決できる次元の話ではないのである。

一学級の児童生徒数の数と担任教師の仕事量は比例する。このごく当たり前のことを逆に考えれば、学級規模を小さくすることが、長時間労働を是正する一歩になることは明らかだ。教育行政は教育に関するあらゆる条件を整備する責務がある。「変形労働時間制」は、「長時間労働」を目の前にした教育行政の条件整備義務の放棄だ。本来必要とされる教育条件整備は、学級規模を縮小し、教職員を確保し、本来支払われるべき給与を教職員に対して支払うことだ。

（東北生活文化大学）

注1 義務標準法により、小学校第一学年のみ35人、それ以外の小中学校の各学年においては、40人が標準学級規模とされている。

注2 山崎洋介（2017）『いま、学校に必要なのは人と予算』新日本出版社

# 個として向かい合う

## 現代の幼児教育の現場から

虹乃 美稀子

この「つうしん」に寄せられる様々なレポートは深く頷かされることが多く、現代の教師という仕事の困難さに思い入る。私の園は自宅で営むいわば私塾の自主幼稚園。定員15名の小さな園で私的な教育現場だが、そこから垣間見える現代の子育てが抱える困難な問題は、この「つうしん」を読むたびに「やはり、そうか」と考えさせられる。

保育科を卒業してはや四半世紀。初めて「保母」として公立保育所に勤め始めた頃を思い出すと、世の中の加速する変化、子育てのありようの変貌を強く感じる。そして、いつの間にか歳を重ねた自分が、気づけば言い訳のしようのない「大人」となり、この社会を形成する責任ある一人となっている現実に愕然と気づく。

世の変化の中で特に今気になるのは、一気に世界に広がったスマホが使用者である人間とその社会にもたらす様々なレベルの影響と、そうしたデジタル文化の中で育っていく子どもたちが、瞬く間にゲーム中毒になっている状況である。不登校や人間

関係の問題も原因を探ると、ゲームにはまり込み生活そのものが崩れてしまっているという話をあまりによく聞く。こうしたデジタルデバイス（ネット）に繋がっているパソコンやスマホ、タブレットなどその端末類）は今や生活の必需品となり、私も愛用者のひとり。しかし、フェイスブックやラインといったSNSは、よほど気をつけないと無意識に画面をスクロールし続ける中毒性がある。大人が使用をコントロールできないのに子どもに「スマホの使い方気をつけましょう」と言ったところで「飲酒運転する時は気をつけましょう」と言っているようなものではないかと感じてしまう。

Tくんのことを、書きたいと思う。

Tくんは、1歳の頃から月1回の親子クラスに来ていた。過敏な子で、身体は大きいがよく泣き情緒が安定しにくかった。他の子たちが年齢相応におもちゃや他児に興味を示し関わろうとする中で、Tくんはぐずり泣く時間の方が多かった。

成長するにつれて、その姿は顕著になっていく。

年齢より一つ下のクラスに通ってもらい様子を見守ってきた。しかし、次第に教室にいる間ずっと混乱して大声で泣きわめいているようになる。

他の場所ではどうですかとお母さんに尋ねると、出かけるのとどんな場所でも同じように泣いていると言う。なんと大変なことだろう。お母さんも大変だが、一番大変なのは一日のうちの殆どを気持ち安定しないまま終えていくTくん本人である。何とか力になりたかったが、Tくんは3歳になった春、バス通園のある大きな幼稚園に入園してしまった。

私たちはTくんがお母さんと離れてバスに乗り通うことができるのか心配だった。外界に不安に反応し、過敏に恐がりやすいTくんが、今の状態で集団の中で安心して自分の世界を広げていくことができるのだろうか。もう少し個別の関わりを必要としているのではないだろうか。

それから1年後、お母さんから連絡が入った。当初こそ泣きながらもバスに乗り、なんとか通えていたが、それも少しの間でその後は行けなくなったと言う。園側も配慮してくれてお母さんと一緒に集団に入らず個別に過ごすのを提案してくれたが、それでも行きたがらないこと、情緒が安定せずにいることは変わらず、こちらへの転園相談だった。

前述のように、当園は私の自宅で営む零細な私塾である。教師の数は補助も含め「3歳以上15名」の定員に満たずとも3名を維持しているが、個別に支援の必要な子がいたとしても、それ以上の大人を置くことは困難である。教室の広さや別室がないと言う物理的条件もある。一年会っていないTくんを幼稚園部で迎えられるか慎重な決断が必要だった。

まずは1学期間、2歳児プレ幼稚園クラスに月

2回通ってもらうことにした。このクラスは親も参加する。幼稚園に準じるクラスだから、この時間は子どもが中心の時間。保護者には大人同士のおしゃべりは控えてもらい、なんらかの仕事（おやつ作りや糸紡ぎなど）を行ってもらう。そして「自由遊び、片付け、お遊戯、おやつ、外遊び、お集まり」という、心地よい生活リズムが刻まれる幼稚園部の流れを親子で体験していく枠組みとなっている。

ここでTくんの様子を見守りつつ信頼関係を育み、教師に愛着を持ち始めたのを確かめてから、夏休み明けに幼稚園部に転園した。初めはやはり大泣きした。しばらくはお母さんと朝の自由遊びの1時間、ただ園で過ごした。まだ他の子どもへの関心はみられなかった。しかし、ひとり遊びはできるようになる。一見脈絡のない独り言を続けながら、積み木やおもちゃの小人や動物で遊んでいる。しばらくすると、お母さんが離れても気づかぬようになった。そうして、出席、欠席を繰り返しつつ、ゆっくりと彼のペースで園に馴染んでいき、2ヶ月ほどで家庭以外に自分の居場所を見つけたようだった。

それからの馴染みは早かった。他の子ども名前を呼ぶようになり、表情も豊かになってきた。「明日も幼稚園ある？」と聞く。ある日、昼食後の歯ブラシを「今日、お持ち帰り？」と聞いてきた彼に、そばにいた年長女児が「持つて帰るよ。明日は遠足なんだから。Tくんも来るでしょ。」と言った。その時、その言葉を彼が喜びとともに受け取っているのがじんわりと感じられた。「人と繋がることの喜びを知る」ことは幼児期に育てたい大切な心情だが、彼にとつて遅ればせながら、まさに今深く味わっているというのが見て取れた。

この冬も12月は毎日「生誕劇」を行った。「練習」や「本番」はなく、誰かに見せることが目的でもない。毎日役が変わり、初回から教師の歌と言葉だけで進行する劇遊びである。やつと一人で登園できるようにになったTくん、果たして1年で一番子どもたちが楽しみにしている劇遊びを一緒に楽しめるだろうか。

心配は杞憂に終わった。彼はこの劇遊びが初日から大好きになり、家でも再現して遊んでいた。最終日は保護者参観となるのだが、落ち着いて「青の王様」を演じきった。先日の知能検査で、IQが境界値だったと聞いたがどうなのだろう。Tくんは今まで世界への不安が強すぎて、自分の力を存分に発揮できなかっただけではないのだろうか。

彼には特別な働きかけができたわけではない。ひたすら繰り返す園での安定したリズムある暮らしを、愛情深く淡々と営む努力を続けただけである。



ただ、家庭にお願いしたのは、テレビを含む様々なスクリーンをなるべく見せないように配慮してくれ、ということだった。というのも、生育歴を聞いた時にお母さんがプロガーで、赤ちゃんの頃から膝に乗せてパソコンの前の向かう時間がとても長かったという話を聞いたからである。これは彼の育ちが抱えた困難さを理解するに十分な情報だった。おそらくTくんは人間の感覚形成における最も重要な乳児期にスクリーンの前にいる時間が多かったために、自分の感覚器官を通してリアルにこの物質世界と出会う経験が減り、その分バーチャルな電気信号に晒され情緒の安定も失われかけていたのだと思う。お父さんも子守りをする時は、つい映画などの映像を見せがちで、だから以前のTくんは教室にいても、前日に見た映画のセリフや音楽を脈絡なく大声で叫び続けることが多かったが、最近ではすっかりそんな様子も見られずに、年齢らしい落ち着きと周囲の人間への愛情表現が見られるようになってきた。

こうした家庭への協力の要請は、私塾だからこそできるかもしれない。公立保育士だった時代は家庭の暮らし方に言及することは、プライベートなこととして控える場面も多かった。しかし、子どもたちが小さいほど、家庭での暮らしのありようは子どもの育ちそのものに直接的な影響を与えている。現代だからこそ教師と保護者はこれまで以上に、人間対人間の個人的な信頼に基づく子どもへのアプローチを協働していくことが、とても大切なのではないかと感じている。

（東仙台シユタイナー虹のこども園）



小学校の卒業式が嬉しくてたまらなかった。泣いている子がいたけれど、僕は全然悲しくなかった。早くこの学校と別れたかった。

それはまもなく運動会をひかえた体育の時間の出来事だった。50メートル走の記録を取る日だった。運動がそれほど得意でない僕も走るのだけは好きだった。ここで頑張ればリレーの選手にもなれるかもしれない。8人くらいで一斉に走らされた。一生懸命に走る。

息を切らせながらゴールすると、先生が不機嫌そうな声で怒鳴った。「だめだ、もう一回走れ」と何が悪いのか分からなかったけれど、僕たちはまた一生懸命走った。先生はストップウォッチを見ながら「前の記録より、遅くなった。おまえたちは相談してわざと遅く走ったな。あとで、一人ずつ職員室へ来い」と言っ

た。職員室へ行く。「多田、おまえはどうして遅く走ったんだ。なぜそういう相談をみんなでしたんだ？」と言う。遅く走る気持ちなんか毛頭なく、みんなでそんな相談するはずもなく、そう言われて悲しくて悔しくて職員室でポロポロ泣いてしまった。卒業式までそのクラスの中で楽しい思い出はな

かった。楽しいこともあったかもしれないけれどすっかり色あせていた。早く卒業したかった。

中学校へ入学すると、どの教科の先生の授業も個性的で面白かった。その中でも特に数学の前角地秀幸先生の授業は面白かった。まだ大学を出たばかりで、いろいろな工夫して授業をしているのが分かった。関数の授業の時には黒い

## わたしの出会った先生 28

# 見ていてくれたんだ

箱を持ってきて上からお金を入れると下から別なものが出てくる自作教材を持ってきた。

でも、そんな授業のことより、授業中の「脱線話」がまた楽しかった。今日はどんな話をしてくれるのだろう。先生に脱線話をさせるために、生徒たちは先生にそれとなく話題を振る。「先生、昨日の身体連の野球の試合はどうだった？」先生は野球部の監督でもあった。その年、うちの野球部は負けてし

まっていた。

「一打逆転で勝てそうだったんだよ。最後の打者の打球はいい当たりで、あれで逆転勝利と思ったんだ。そしたらボールひとつ分それでファールさ。あれはいい当たりだった」と臨場感たっぷり身振り手振りを交えて話してくれた。いつもそんな感じだった。

中学3年生になった。運動が苦手な僕もバスケット部に所属し万

もどされたが、試合はその勢いで逆転勝ちし、地区大会優勝で終わった。

次の日の数学の時間。みんなの前で前角地先生のいつもの脱線話が始まった。「昨日はバスケの試合の応援に行つたんだ。そしたらな、多田が途中から出たんだよ。ほんとにわずかな時間しか出なかったんだけど、こいつが出てからフリースローになり同点にしたんだ。そこからチームが勢いづいて勝ってしまったさ、いやあ面白い試合だった。僕は、顔から火が出るほど恥ずかしかった。スポーツで活躍することがほとんどなかった僕のことが見ていてくれたんだ。恥ずかしかったけど嬉しかった。泣きたいくらい嬉しかった。

## 多田 博 茂



年補欠ながらも必死に試合に臨んでいた。レギュラーの子たちがとても上手いので、ほとんど試合に出る機会がないのだが、最後の決勝戦で途中数分だけ出場となった。試合に出たとたん、相手チームの選手に、弾き飛ばされてしまった。ファールだ。フリースローのチャンスをもたらす。1点差で負けていたので1本でも入れば同点だ。1本目のシュートは入らず。2本目に入った。そのあとすぐにベンチに

(東北福祉大学)

# 一での学習活動

みやぎ教育相談センター所長  
寺 沢 幹 緒

ようで、よくわからない様子でした。この公式を作るには、「分配法則」という法則を使わなければなりません。 $a(b+c)=ab+ac$  という形で教科書に載っています。お母さんは「そういえば聞いたことがある」という程度の認識でした。そこで私はちょっと考えて、「1個50円のミカンと1個100円のリンゴを5個ずつ買ったら代金はいくら？」と質問しました。そのあとのやり取りを再現します。

お母さん：50円×5個で250円、100円×5個で500円、だから250円+500円=750円。

寺沢：それで正解だけど、私だったら、みかん1個とリンゴ1個で150円。それを5個ずつ買ったのだから150円×5個=750円。

お母さん：なるほど。その方が賢いですね。

寺沢：これが分配法則。日常生活でもしょっちゅう使うよね。

お母さん：？

お母さんの計算法は分配法則の右辺、私の計算は左辺です。この二つの違いは、足し算と掛け算のどちらを最初にやるかということで、分配法則は、その順序を変えても結果は同じだということを意味しています。そして「分配」というのは式の形からきた名前であって、この式の本質を表したものではないということを説明しました。

それから話は横道にそれて、分配法則を駆使して、 $(a+b)^3$ 、 $(a+b)^4$  の展開公式を作ってみようということになり、やってみるとこの展開公式には何かの規則がありそうです。実は、この規則は「二項定理」という形で高校2年で学習するのですが、それを理解するためには組合せの総数  $nCr$  の計算法を学ばなければなりません。「やってみたいですか？」と聞くと「ぜひ」ということでしたので、初等幾何学はしばらくお休みにして、順列・組合せを学び、そのあとで二項定理を学ぶことにしました。ちょっと難しい題材で苦勞しましたが、合計8時間ほどの時間をかけて何とか制覇しました。

本人曰く「先生の授業を受けていると分かった気になるけれど、家に帰るとまたわからなくなる」とのことです。毎回復習を欠かしません。授業中もとても熱心ですが、

今テストをしたら恐らく合格点は取れないでしょう。でも、自ら主体的に学ぶ姿を見ているとこちらも楽しくなります。

センターでの学習の目的は、点数が取れるようにすることではなく、学習を通じて学問の面白さに気づき、学習者自身が主体的に学べるようにすることです。不登校の子どもたちの中には勉強が得意な人もいますが、教科書や問題集でやったことのある問題は解けるけれど、そうでない問題に対しては何からどう手を付けていけばいいのかわからなることが多いという印象を私は受けています。

不登校で中退して、通信制高校に入り直し、3年間センターで学習したM君もそのタイプでした。学習を始めた当初は、「君の学びに向かう姿勢が違う。もっと柔軟に考えなさい」と何度も注意したものです。でも、彼の私の叱責に耐えながら、必死に食らいついた結果、3年間で高校数学の大半を学び通すことができました。今、M君は母親の住む海外で大学生活を送っています。人生何が起るかわかりませんが、きっと乗り越えていけるのではないかと私は信じています。

真の学力とは何かという問題に答えを見つけるのはたやすいことではありませんが、少なくともテストの点数で測る「学力」は真の学力の一側面でしかない、センターで学習する人たちを見てつくづく感じます。当センターの取り組みはその点でも貴重なものだと言えるでしょう。

## 「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022-272-4152

### 相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・  
家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき9時から17時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間、休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。

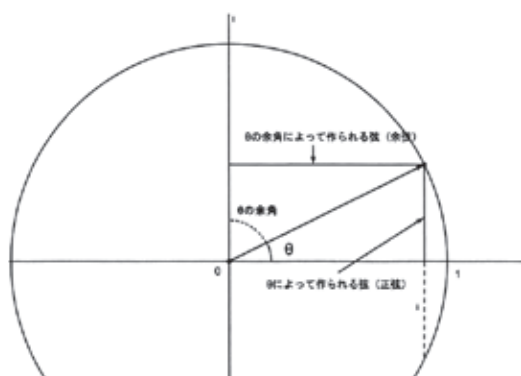
「センターつうしん」に寄稿するようになって、4度目の執筆が回ってきました。今回はあまり知られていない、センターでの学習活動について報告したいと思います。

不登校などで相談にみえる親御さんたちの最も切実な悩みは、「学校に行かないと学力がつかないのではないか」ということです。今、学校では学力競争が以前にもまして激しくなり、小学校低学年から塾に通っている子どもたちも少なくありません。学力はないよりはあった方がいいものであることは明らかですから、親御さんたちの悩みも十分理解できます。では、学力はどのようにして測ればいいのでしょうか。学力を測るもっとも単純な基準は「テストの点数」です。全国学力テストで平均点が最も高かった県が「学力日本一」などと報道されていることをみればテストで獲得した点数が高いほど学力が高いと思われていることは間違いないでしょう。

2015年の8月に当時の鹿児島県知事が「女の子にサインコサイン教えて何になる」と発言し、話題になったことがあります。知事が定例記者会見(2015/8/28)でこの問題に関する記者からの質問に答えた様子が鹿児島県のホームページに載っていますので、その一部を引用してみます。(下線:筆者)

(前略) 昨日の教育会議ではいろんな議論がありました。(中略) 教育会議でありますから。そのあと学力調査の報告があったんです。鹿児島がなかなか順番が伸びないという過程の中で、確か「小中校(編注:もしくは小中高)においてはきちっと勉強しないとイケないよね。そこからさらに何を教えるかは難しいよね」という類の中で、たまたま女性に関連して「サイン、コサインというのは教えて何になるのかなと思うこともありますね」ということを言っているんです。そもそも「サイン、コサイン、タンジェント」皆さん方、サインアルファプラスベータ、コサインアルファプラスベータを高校時代に習ったと思います、あの公式を覚えておられますか。私は人生で1回使いました(中略)。だからサインコサインは一体何に使うのかね、というのは従来からあって、昨日はたまたまそれと女性を結びつけて、口がすべった形でしゃべった、というのが本当のところですね(後略)。

この発言は、「女性蔑視」だとしてSNSなどで紹介されて批判の対象になりましたが、私のような数学屋から見ると、この人の数学教師はいったい何を教えたのだろうという疑問がすぐ湧いてきます。サインの綴は sine (省略して sin) で日本語では正弦、コサインの綴は cosine (省略して cos) で日本語では余弦といいます。つまり円の動径(回転する半径)の回転角に対する弦の長さ(の半分)のことなのです(下図参照)。教師が授



業中に少しでもこのことを教えていれば、三角関数が回転運動の表現に使われる関数だということはわかったことでしょうか。この人を教えた高校時代の数学教師は、サインやコサインがどう使われるかよりも、公式を使って問題をどう解くかしか教えてこなかったのではないかと、そう勘ぐりたくなります。

さて、小学4年生から学校に行けなくなったKさんはずっとセンターでの学習を続けていました。Kさんのお母さんも一緒に勉強していました。そのうち算数で分からないことがあると私に聞くようになり、ついにはKさんとは別に高校数学を勉強し直したいと思うようになり、私もそれに応ずることにしました。

最初に勉強したのは、三角形や円の性質を学ぶ「初等幾何学」です。1本の補助線が図の見方をガラッと変える幾何学の面白さにはまってしまったようでした。あるとき、証明をやっていたら、 $(a+b)^2$ の展開公式を使う場面に遭遇しました。皆さんご存じのように、 $(a+b)^2=a^2+2ab+b^2$ となるのですが、お母さんは高校時代数学が苦手だった





### おすすめ映画

## 私(たち)はどう生きるのか

『i新聞記者ドキュメント』を観て

この表題は、二〇一七年度コミック版でベストセラーになった「君たちはどう生きるか」(吉野源三郎)をもじったものである。大学時代、研究室で自主ゼミとして読み合った本である。この本の中で、主人公のコペル君は様々な経験とおじさんとの対話を通して世の中の仕組みや自分の存在意義をつかんでいく。このコペル君の成長を通して、作者は「君たちはどう生きるのか」と問いかけてくる。

『i新聞記者ドキュメント』を観ていると途中から、ずっと私の頭の中に「この映画を見た俺がどう生きるのかを問われている」気がしてしよすがなかった。はつきり言って、今の政権による政治は腐っていると。何をしたら、その陰で人が死んでいったって、「資料がない」、「遺憾である」、「私は関わっていない」などと言って、まともに向き合わないのだ。挙句マスコミを掌握し、反旗を翻す者には、ありとあらゆる手で嫌がらせをする。そうした者たちが「いじめ防止」を声高に叫ぶなんて、悪夢としか思えない。

しかし愚痴っているだけでは、世の中は変わらない。映画の中で、記者の望月氏は、真相を追い求めて、妬み、嫉み、妨害、ありとあらゆる壁を仕掛けられる。しかも、それは権力による非常に厭らしく稚拙な脅しだけでなく、同じ記者からの同調圧力もある。しかし望月氏はめげない。私iとして、自分の生き方を曲げずに貫いている。こうした姿勢に励まされた。ただ私は、iとしてだけではなく、weとしても仲間たちと共に、歩んで行こうと強く思った。巨大な権力に対しては、同じ志を持つ仲間との共同が大きな力となるから。そのためのiでありたいと思った。そして、これを読んでいる皆さんにも、この映画を見てもらって問いかけた、私(たち)はどう生きるのか?



『i新聞記者』の制作風景や、望月記者のインタビューの様子、取材先での様子などが写った写真の集合。右下には、望月記者の顔が写っている。 (鈴木 吉雄)

### センターの動き

#### 10月

- 11日 事務局会 次号つうしん特集について協議。次回までの宿題にする。
- 12日 第2回こくこ講座は台風19号の影響で中止。
- 15日 午後から「仙台の子どもと教育とともに考える市民の会」事務局会。第2回こくこ講座を26日開催で準備に入る。
- 18日 事務局会、つうしん発送作業。97号特集について議論。
- 19日 「教育」を読む会、流会。県内に大雨洪水警報発令。
- 23日 高校生公開授業の会場下見。東北大学の教室に決定。東北大職組・宮教大職組へつうしん届ける。
- 24日 村井先生からこくこ講座の「ヒロシマのうた」の資料届く。
- 25日 公開授業案内チラシ・ポスター作成・発注。
- 26日 第2回こくこ講座開催。台風による急な日程変更にもかかわらず参加した方の力で充実した討議が行われた。
- 29日 仙台市教育委員会に高校生公開授業の名義後援の申請書提出。
- 30日 高校生公開授業チラシ・ポスター完成。教育のつどい準備作業。
- 31日 センター春のつどいの日程について、講師の田中

#### 11月

- 孝彦さんと連絡とる。
- 2日 みやぎ教育のつどい
- 8日 講座世話人会 午後事務局会、高校生公開授業のチラシ・ポスターを県内の高校へ発送。市教委より公開授業名義後援OKの返事届く。
- 11日 哲学seiga、シユタイナーの教育5回目
- 12日 公開授業QRコードから申し込み5名。午後、中森さんに授業実践についての取材。
- 13日 従軍慰安婦問題パネル展を観てくる
- 14日 小田田農林高校での小森陽一さんの授業参観・検討会に参加。公開授業申し込み、4日連続で届く。
- 15日 センターつうしん97号の執筆者、なかなか決まらない。
- 16日 「仙台の子どもと教育とともに考える市民の会」総会。記念講演は内田樹さん。会場満席となる176名の道徳と教育を考える会。中1の教科書を読む。
- 19日 第3回こくこ講座のチラシ配布。中野さん案内状発送作業に来室。
- 21日 数見代表とつうしん97号特集について話し合う。公開授業参加申込、定員の半分を超える。
- 23日 「教育」を読む会
- 28日 国語なやんでるたーる「ヒロシマのうた①」

#### 12月

- 30日 尾形さん、こくこ講座の教材研究で来室
- 4日 仙台市教委と教職員定数問題について話し合い。
- 5日 国語なやんでるたーる「ヒロシマのうた②」
- 6日 高校生公開授業参加者へ葉書送る。つうしん97号執筆者固まる。年内発行断念。
- 7日 午前、みやぎ教育のつどい実行委員会。午後、第3回こくこ講座
- 10日 市民の会事務局会、公開授業申し込み生徒へ申し込み受理の通知。小田原短期大学の山西さんから、佐藤忠良さんの資料の件でカマラードのバックナンバー問い合わせ。
- 12日 国語なやんでるたーる「ヒロシマのうた③」
- 13日 山極さんのホテル予約事務局会
- 14日 「教育」を読む会
- 18日 千葉保夫さん、つうしん原稿を届けに来室。
- 21日 いのちの教育史研究会 合宿
- 23日 哲学seiga、シユタイナー教育の6回目。
- 26日 宮城民教連代表者会。冬の学習会資料の袋詰め作業。センター内の片付け。
- 27日 きた出版に「つうしん原稿を渡す」。
- 1月5日 宮城民教連冬の学習会 (菅井)